

ヨガ——文化のグローバル化をめぐる

河 原 和 枝

Yoga : A Note on the Globalization of Culture

KAWAHARA Kazue

Abstract : Yoga has become one of the popular physical exercises for many people in advanced countries in recent years. It is generally acknowledged as “a kind of Indian ancient way of training”, “a practice including certain postures (*asanas*), breathing, and meditation” and “a proved way for good health.” Various combinations of these three mythical elements seem to attract modern people. The purpose of this study is to consider how “modern yoga” which contains these elements has been elaborated and disseminated. The process of the dissemination of yoga can be seen as a case of the globalization of culture. This paper tries to trace, as a first step, how traditional Indian yoga came into the worldwide spotlight in the end of the 19th century focusing on the World's Parliament of Religions of 1893 and Vivekananda who introduced yoga there.

は じ め に

文化のグローバル化現象については、よく引き合いに出されるディズニーランドやマクドナルドなどのほかにも、さまざまなケースがあり、それぞれに異なるかたちがある。そのひとつの事例として、ここではヨガを取り上げてみたい。

ヨガ¹は今日、一般的な健康法のひとつとして認知されており、成人のヨガだけでなくキッズ・ヨガ、シニア・ヨガ、マタニティ・ヨガなど、ライフステージに合わせて誰もが行える運動となっている。街に出れば、さまざまな流派のヨガのクラスが開講されているし、地域のスポーツクラブでも、たいていはヨガの名をもつエクササイズがプログラムに組み込まれている。しかし、これほどヨガが広く行われるようになったのは、比較的近年のことである。日本では戦後、何度かヨガ・ブームと言われた時期があり、一部の人びとに愛好されてはきた。だが、1995年、地下鉄サリン事件を起こしたオウム真理教がヨガによる修業を標榜していたため、ヨガ全般が恐ろしいカルト的なものと関わっているかのように見られるようになり、それ

まであったヨガ教室に通う人も激減した。それが人気を取り戻し、さらに広がったのは、2003年以降、オウム事件のショックが薄れ、ハリウッド・セレブのあいだで流行していたパワー・ヨガを始めとする欧米系の動的なヨガが、ファッショナブルなイメージで日本に流入してきてからのことである。

日本にはまだ明確な調査データはないが、アメリカ版ヨガ・ジャーナルによれば、アメリカでは2012年、2040万人がヨガを行っており、内訳は女性が82.2%、18歳から44歳までが62.8%を占めている。ヨガ人口は2008年の1580万人から29%の増加、経済面から見ると、ヨガのクラスやヨガ関連商品に年間103億ドルが消費され、2008年の57億ドルから80%も増加している。また、ヨガの実践にもさまざまな度合いがあるが、成人の8.7%がヨガを行い、行っていない人のうち44.4%がヨガを試したいと考えているという²。人気のあるハリウッド俳優や有名モデル、ミュージシャンたちがヨガ愛好家として知られ、ヨガ産業が今や1兆円規模となっていることを考えると、近年、アメリカでヨガへの関心が非常に増大しているのは間違いない。1970年代から80年代にかけてエアロビクスがアメリカから世界に広がり、日本でも流行して、今

では完全にスポーツの基本的なプログラムとして定着している³⁾ように、ヨガも今後、同様の道を辿るのかもしれない。しかしなぜ、今、ヨガがこれほど急速に普及したのだろうか。

エアロビクスと異なり、ヨガはたんなる体操にとどまらない性格をもっている。ヨガというと、ほとんどの人が、インド古来の、何か難しいポーズをとる、健康に良いらしいもの、というイメージをもつ。実際、一般にそのように説明されてもおり、たとえば NHK のテレビ番組「きょうの健康」では、『「ヨガ」は、古代インドの修行法を基にした柔軟運動です。『ポーズ』『呼吸』『瞑想』の 3 つの要素を取り入れることで、体をよりよい状態へと導きます』といい、さらに「ヨガの効果は明らか」として、次のように述べている。

ヨガは、「うつ症状」「腰痛・膝痛」「高血圧」などに対し、改善効果があることが科学的にわかっている。例えば、3 つの要素をしっかりと取り入れた状態で、ヨガを累積 60 時間行くと、その後の平均的な血圧が、収縮期血圧では約 8mmHg、拡張期血圧では約 6mmHg 低下することがわかっている。3 つの要素のうち、どれか 1 つを欠いた場合でも、ある程度の改善効果がある。(「運動で健康『体を変える！ヨガ入門』」(2014 年 5 月 22 日⁴⁾)

ヨガの流派によって、力点の置き方やプラクティスが異なりはしても、今日のヨガに関わるディスコースのほとんどは、この「古代インドの修行法」、「ポーズ(アーサナ)・呼吸(プラーナヤーマ=調息)・瞑想」、そして科学的に検証された健康に良い効果、という 3 点から構成されているといっていよい。この 3 つのいわば神話要素の絡み合いが、ヨガが人びとを惹きつけることと深くかかわっているように思われる。これらの要素を追いつながら、インドで誕生し、世界的エクササイズにまで成長したヨガについて、いくつかの観点から考察していきたい。本稿ではまず、そのグローバル化の最初の過程について辿ることにする。

1 ヨーガの伝統——『ヨーガ・スートラ』とハタ・ヨーガ

ヨガとは何か。かつて 1970 年代のヨガ・ブームの一翼を担った佐保田鶴治は、大阪大学名誉教授でインド哲学を専門とし、ヨガの実践者、指導者でもあった⁵⁾。彼は、次のように述べている。

ヨーガというインドの言葉は、「つなぐ」という意味の言葉から生まれた名詞で、その根本的な

意味は「結合」ということである。ヨーガという言葉の派生的な意味としては「合一」「接触」「適用」「適合」「努力」その他いろいろな意味がある。その外に「軛^{くびき}」という意味もある。この意味は言語学上では「結合」よりもさらに古い起源をもっている。ヨーガという言葉のこれらの意味は、ヨーガという名称の内容を知るのに、なんらかの手がかりになるだろうか？近代のヨーガ研究者の中には、「結合」とか「合一」とかいう意味から、ヨーガという名称の内容を概念的に定義しようとする人が少なくない。西欧社会にヨーガ思想を宣布した偉大な指導者ヴィヴェーカーナンダ師はヨーガを「心理的統制によって、低い自我と高い自我とを結合すること」と定義した上で、「われわれを神へみちびく、何らかの仕方の修養^{カルチュアー}」という非常に広い意味規定をつけている。……その外にも、ヨーガを「神的存在との合一」という意味から定義しようとする人は多い。

しかし、ヨーガという言葉の意味から、ヨーガという名称の内容を理解しようとするのは、結局は徒労に終わるであろう。というのは、インドでヨーガと呼ばれている行法や思想はあまりにも多種多様であるからである⁶⁾。

佐保田はそれらを「仮に現代的な用語を以て特色づけるとすれば」として (1) ラージャ・ヨーガ (心理的) (2) ハタ・ヨーガ (生理的) (3) カルマ・ヨーガ (倫理的) (4) バクティ・ヨーガ (宗教的) (5) ラヤ・ヨーガ (心霊的) (6) ジュニャーナ・ヨーガ (哲学的) (7) マントラ・ヨーガ (呪法的) に分類し⁷⁾、「少なくともインドでは、ヨーガはインド教の別名と見てもよいほどで、インド教の中から、庶民の原始的な信仰や呪術を除いた部分は、すべて、ヨーガに属しているということが出来る」という。また、インドのバイブルともいべき聖典『バガヴァッド・ギーター』の 18 章すべての題名にヨーガという言葉が組み込まれていることから、「ここではヨーガはみち^{ミチ}(道)すなわち特定の行法というほどの意味に理解するより外はない。…この自分をしつけ、訓育してゆくこととその仕方がヨーガとよばれるものである」として、「ヨーガを特色づけるものは自我の観念である」とも述べている⁸⁾。

ヨーガの語義が非常に幅広く多様であることがわかるが、それはヨーガがインドの思想と宗教の遠大な歴史と関わっていることによる。先の、ヨーガの「軛」の意味について、佐保田は、カタ・ウパニシャッドに典拠をもとめ(馬を車につなぐということから転じ、心理器

官を抑制する行法を示す)、またそれより以前のターイッティリーヤ・ウパニシャッドにもヨーガが「何らかの行法または流派の名称を意味するらしい」ものとして見出されるという。そしてこのようにバラモンの思想体系の中にこの語が見られることと、「個人の解脱」を究極目的とする原始仏教やジャイナ教と近い思想や行法をもつことから、ヨーガは「仏教やジャイナ教の興起と前後して、バラモン社会の一部の人たちによって作り上げられたのであろう」と推測している。すると、その起源は紀元前4～5世紀ごろになろうが、近年、さらに遡る観点もあり、山下博司は「文献のなかでヨーガが実体的なかたちで現れてくるのは『仏教が興る前後』としておくのが無難」としつつも、「今やインダス文明の段階におけるヨーガの存在すら示唆されており、仮説にはとどまるものの、ヨーガの起源は一挙に紀元前三千年紀にまでさかのぼろうとしている。さらに、それより数千年以前にもたどり得る先住民の文化の問題にまで議論がおよびつつある⁹⁾」と述べてもいる。

淵源をたどると途方もなく遠いことになるが、いずれにせよ、ヨーガは、紀元後4～6世紀ごろに体系化され、パタンジャリに帰せられる経典『ヨーガ・スートラ』が編纂されて、正統バラモン系統の六派哲学のひとつ、ヨーガ学派が確立される。ただ『ヨーガ・スートラ』は、パタンジャリが紀元前2世紀ごろの文典家であるにもかかわらず、後代の思想も含まれた雑纂的なものであるため、実際には何人かの手になったと考えられている¹⁰⁾。本書は、「ヨーガとは、心のはたらきを止滅することである」「心のはたらきが止滅された時には、純粹観照者たる真我は自己本来の態にとどまることになる」¹¹⁾といった、195の短いアフォリズムからなり、サーンキヤ哲学に影響を受けたヨーガの思想¹²⁾と、(1)禁戒(ヤマ)(2)勸戒(ニヤマ)(3)座法(アーサナ)(4)調息法(プラナーヤーマ)(5)制感(プラティヤーハラ)(6)凝念(ダーラナー)(7)静慮(ディヤーナ)(8)三昧(サマーディ)の八部門にわたる行法を説いている。『ヨーガ・スートラ』の体系は今日、一般にクラシカル・ヨーガともよばれ、本書はヨガの古典として尊ばれ、この八部門は一般的なテキストにも引用されている。しかし、ここには瞑想のための座法が示唆されているのみで¹³⁾、今日のヨガのさまざまなポーズ(アーサナ)は存在しない。

現代のヨガに繋がる「アーサナ(ポーズ)」を含む行法としてのヨーガは、ハタ・ヨーガと呼ばれる。ハタ・ヨーガは、『ヨーガ・スートラ』から何百年も

経た後に、登場した。ハタとはサンスクリット語で「力強さ」や「努力」といった意味をもち、内なる「ハ」(太陽)と「タ」(月)の結合を示すとも解釈される。ハタ・ヨーガについても諸説あるが、ゴラクナータを開祖に帰し、密教要素が強調されるころは、ほぼ共通している。たとえば佐保田は、これを13世紀初めごろに活躍したゴラクナータが祖であるとされる密教的なヨーガであるとし、「肉体的・生理的操作を主とし」「クンドリニーという女性的な原理を重んじ、左道密教的なエロチシズムを含むところはインドにおける仏教の末期をかざった密教的仏教に似ている」と述べている¹⁴⁾。山下もゴラクナータを「事実上の始祖」とするが、彼を10～12世紀の聖者とし、さらにナータ派の祖とされる10世紀ごろのマツイェンドラナータに遡れるともいう。そして「その実践を通して心と体のバランスを追求する体系」「アーサナ(姿勢)、プラナーヤーマ(調息法)、ムドラー(秘儀的な集中技法や象徴的体位)、クリヤー(行為・技法)、バンダ(絞めつけ)などの身体操作により、エネルギーのチャンネルを開放し、それをもとに精神的エネルギーを解放・発露させる。ハタ・ヨーガの修練を積み、強さと柔らかさという肉体的な効用だけでなく、集中力などの精神的パワーを養うことができる」と説明している。また、ヨーガの完成と、それによってもたらされる神秘力を示すサンスクリット語の「スイッディ」が日本の密教で「悉地」にあたることなど、ハタ・ヨーガと仏教(密教)との関連や、「自然界の物質や身体を自由に操作し、超自然的な結果を生じさせようとする」点で、錬金術との関連についても指摘している¹⁵⁾。K・リバーマンによれば、ハタ・ヨーガは端的に「タントラ(密教)と大乘仏教、ヒンドゥー教、錬金術、魔術との混合物」であり、ゴラクナータには仏教徒、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒の弟子がいたという¹⁶⁾。今日見られるハタ・ヨーガの文献には、『ハタヨーガ・ブラディーピカー』(16～17世紀)、『ゲランダー・サンヒター』(17世紀?)や『シヴァ・サンヒター』(17～18世紀?)があり、これらのテキストには、ハタ・ヨーガの観念に加え、クンドリニーを目覚めさせて解脱に至るための身体操作の具体的な技法や、タントラ生理学が詳述されている。これらは19世紀から20世紀にかけて、ヒンドゥー教の聖典のシリーズとして、サンスクリットから英語に訳出され、世に知られるところとなった。

こうしたハタ・ヨーガが、インドで実際にどのような

に行われ、人びとにどのように見られていたのか、20 世紀になってからのことであるが、沖正弘の興味深い報告がある。沖は、第 2 次世界大戦中、軍参謀本部の調査員として渡印し、1939 年、親しくなったインド人医師に「インドにはおもしろいものがある。心臓を自分で止めてしばらく死に、また生き返ってみせる見せ物だ」と、ヨギの見物に誘われる。

「ヨギ」——私にははじめての言葉だ。彼の説明によると、ヨギとはヨガを専門に研究したり、実行する人のことで、「ヨガ」というのは五千年ぐらい前に起こった、インドの古い心身訓練法とのことだ。ヨギの中には、長年の訓練によって、ときどき特殊な能力の発達した者がいて、心臓を自由に止めたり動かしたりできる。中には冬眠状態にはいって、1 ヶ月くらい生き埋めになり、また生き返る者さえある。1 週間ぐらい前からマドラス郊外の寺にお祭りがあって、その見せ物の中に心臓を止める実演がある。昨日見てきたが、こういう見せ物はインドでも、そうめったに見られないから、ぜひ見ておいたほうがよい、とのことだった。

沖はショウに出かけ、舞台の上で椅子に座ったヨギが、やがて死人のように真っ青な顔になり、心臓の動きを止めるのを見、医師とともに聴診器でそれを確認する。会場のテントの中は不気味なほど静まりかえり、そのまま 30 分ほどしてのち、徐々にヨギの脈が戻ると、客席にも安堵の色がうかび、やがてざわめきが起った、という。事実か、トリックか、沖は、半信半疑でヨガに関心を抱くようになる。そして別の町のお祭りで「皺だらけの老ヨギが、十センチぐらいの先のとがった釘を何十本と打ちつけた板の上で、すっぴんかで寝ていた」り、「黄色の衣をまとった若いちゃんまげ姿のヨギが、刃を上に向けた刀を 5 本、板の上に渡して、そのうえで座禅をしていた」り、「ふとったヨギとまだ童顔のヨギがさかだちをしていた。なんでも、この姿勢を毎日 14、5 時間もつづけているのだそう、ときどき見物人が食べ物を渡すと、その姿勢のままで食べていた」りするショウを見る。「それらのヨギたちは申し合わせたように垢にまみれた貧相なようすをしていた。それでも見物人はこれらの人たちを特殊な能力者として扱っているらしい。合掌しては行者のまえにお金や食べ物を置いていた」という。

また、彼はジャイプール郊外の古いヨガアシュラム(塾)で、腸の清掃のために口から紐を飲んで肛門から出したり、サーカスのような綱渡りや怪力の、さま

ざまな激しい苦行をする人々を目の当たりにもする。そこでは老ヨギに、「きょう、きみが見たものがヨガと思っては困る。あのような苦行は、すべて人間のかくされた能力を開発するためにあるのだから。ヨガは魔術でもなければ奇術でもない。肉体の自由を得るための手段なのだ」と教えられたという¹⁷⁾。

1951 年、沖正弘はユネスコの招聘で再びインドに渡り、それを機会に今度は、クヴァラヤーナンダの科学的なヨガ研究所に滞在して「ほんもの」のヨガを学び、日本に持ち帰って、今日にいたるヨガの基礎を築いた。日本のヨガの第一人者であり、彼の弟子にあたる多くの人びとが今も活躍している。

しかし、沖が日本に広めたヨガや、現在、世界的に広がったヨガは、たとえ「古代インドの修行法を基にした」としても、ハタ・ヨーガの經典に示され、また 20 世紀にいたるまでインドの寺や広場でヨギが見せ物にしていたものとはかなり異なる。そこには大きな断層がある。この間に、ヨーガに何が起こったのであろうか。

2 万国宗教会議と

スワミ・ヴィヴェーカーナンダ

ハタ・ヨーガは本来、修行法であり、もちろん見せ物ではなかった。ヨーガの行者であるヨーギ(ヨギ)の姿は、西洋の旅行者たちからはインドの宗教的愚行として敵意や疑いの目で見られてはきたが、それが見せ物化したのは、19 世紀を通じてのことである。その契機は 15 世紀ごろ、ハタ・ヨーガのナータ派の中から、武装した宗教集団が登場したことにある。彼らは交易ルートを支配し、18 世紀には東インド会社の経済的政治的ヘゲモニーを脅かすほどの力をもつようになった。カーストにも社会的秩序にも拘束されず、異様な苦行を行い、放縦で、裸体で放浪し、武器をもって略奪行為を行ったため、支配層からは、イギリス流の礼儀正しさに違背するだけでなく、それ以上に、東インド会社の利益を侵犯する存在として忌み嫌われ、恐れられた。そのため、1773 年にベンガルで最初にヨーギの放浪が規制され、それを皮切りに以後 20 世紀にいたるまで、警察の監視下でヨーギの非武装化と定住化が促進された。その結果、見せ物として生き延びることになったという¹⁸⁾。

イギリス人や西洋的教育を受けたインドの知識層から見れば、ヨーギは、曲芸を見せてお金を取り、淫らな悪巧みをする社会的パラサイトとして、インド文化

の陰の部分を示すものであった。そのようなヨーガが、世界の表舞台に立って脚光を浴び、今日のモダン・ヨガを導く大きな契機となったのは、19世紀末のことである。それはアメリカで『ラージャ・ヨーガ』を唱えたヴィヴェーカーナンダによってもたらされた。

1893年、アメリカではコロンブスのアメリカ大陸到着400年を記念し、シカゴでコロンビア万国博覧会が開催された。1876年のフィラデルフィア万博以来、アメリカで2度目の万博である。「西欧文明の完成者」「西欧文明による世界の解放者」としてのアメリカを世界に示すべく意図され、会場には古代ローマ、ペリクレス時代のギリシア、中世ヴェネチア共和国といった、歴史上偉大な共和国の建物をモデルにした「ホワイトシティ」が建設された。この博覧会に、「物ではなくて人間、物質ではなくて心」をモットーにした、20分野からなる「コロンビア万国博覧会に併設する世界会議」が設立され、その中でもっとも多く注目と参加者を集めたのが、万国宗教会議であった¹⁹。会議にはキリスト教、ユダヤ教のほか、仏教、儒教、ヒンドゥー教、イスラム教などさまざまな宗教を代表する59人が参加した。その中に、「インドの物質的条件を改善する資力を西洋に求め、その代りに彼地に人びとの霊性向上のために福音を伝え」ようと、特別の肩書きも地位もなしにインドからやってきた、ヴィヴェーカーナンダがいた。

ヴィヴェーカーナンダは開会初日、居並ぶ宗教界の代表を前にして、まず「世界でもっとも古い僧団にかわって、皆さんにお礼を申し上げます。もろもろの宗教の母にかわってお礼を申し上げます²⁰。そして、すべての階級すべての宗派に属する、幾百万のインド人にかわってお礼を申し上げます」と歓迎の謝辞を述べ、宗教宗派の枠を越えた「宗教真理の普遍性」と「すべての宗教的自覚の目標の同一であること」を高らかに宣言した。彼は、ヒンドゥー教徒として「私は、この世界に寛容と、すべてを承認することの二つを教えた宗教に属することを、誇りに思うものです。私たちは普遍的な寛容性を信じるだけでなく、すべての宗教を真理として認めるのです」と述べ、「源を異にするさまざまな河川が、すべて海に流れ込んで一つになるように、おお主よ、人びとがさまざまな傾向に応じてたどるさまざまな道は、曲がったりまっすぐであったりさまざまな見えるでありましょうが、すべてあなたのもとに達します」というヒンドゥー教の賛歌を引用して、聴衆を魅了した。そして二週間近く続いた会議で、彼はヒンドゥーのヴェーダ哲学を雄弁に、鮮やかに

説き、一躍、世に知られることになった。彼の普遍的兄弟愛の思想は、欧米の中上流階級の人びとの抱く、理想主義的ヒューマニズムに合致した。ヴィヴェーカーナンダの宗教会議での成功は、彼をインド宗教の代表的権威かつ思想的指導者へと変貌させた²¹。彼の伝記を書いたロマン・ロランは、会議の熱気を次のように述べている。

この力強い言葉の効果は巨大だった。会議に出席した公式の代表者たちの頭上を越えて、その言葉はすべての人に話しかけられ、世論を震撼した。ヴィヴェーカーナンダの名声はたちまちにして輝きわたった。そしてインド全体がその恩恵を蒙った。アメリカの新聞は彼をみとめた。「宗教会議において、彼がもっとも偉大な人物であることはなんの疑いもない。われわれは、彼の言葉をききながら、この教養の深い国民のもとへ牧師を派遣することの無意味を感じた…」(『ニューヨーク・ヘラルド紙』)

このような告白がキリスト教牧師たちの耳に快いはずがないことは想像される。……しかし彼の名声が高まり始めたころ——昇ってゆくこの太陽——光の輝かしさがすべての影を消した。ヴィヴェーカーナンダは時の人になった²²。

ヴィヴェーカーナンダの主張は、彼の師のラーマクリシュナの教えであるとともに、当時のインドの知識人層の思想の一端を示すものであった。19世紀を通じて、インドでは「ヒンドゥー・ルネサンス」「ネオ・ヒンドゥイズム」と呼ばれる運動が進行していた。キリスト教宣教師たちがヒンドゥー教を野蛮な習慣をもつ偶像崇拜の多神教であると批判したのに対抗し、ベンガルを中心とした西洋の知識、教養を身に着けた人びとが、ヒンドゥー教擁護のための宗教改革を試みていたのである。18世紀以来、ヒンドゥー教では宗教儀礼の改革や古いヒンドゥー思想の復興が行われていたが、ラーム・モハーン・ローイが1828年にベンガルで「ブラフマ・サマージ(協会)」を設立したことで、新たな運動が始まった。彼はヴェーダを合理的近代的に解釈し、ウパニシャッドに純粋な一神教が説かれていると主張して、多神教を排した。また社会改革にも尽力し、西洋諸科学の必要性を主張し、新聞や雑誌を発行、イギリス総督を説得して寡婦焚死(サティ)の悪習を禁止させてもおり、のちに「近代インドの父」と呼ばれることになった。ラーム・モハーンの死後、協会はデーベンドラナート・タゴール(詩聖タゴールの父)、そしてケーシャブ・チャンドラ・セー

ンにと引き継がれた。タゴールの時期にはキリスト教を排し、セーンの時期にはキリスト教への傾斜があまりに強かったためにやがて 2 つに分裂しもしたが、協会はしばしばキリスト教ユニテリアンと深く関わっており、さらに西洋のエソテリシズム (秘教) やスピリチュアリズムの観点が多く流入していた。文化帝国主義は、植民地に啓蒙の合理主義を「真理」として持ち込み、インド人に政治的、科学的、技術的、哲学的、宗教的、秘教的なあらゆるものを自らのそれと比較することを強いたし、一方、西洋のオリエンタリストたちはインドに惹かれた。東西の思想は相互に影響しあい、それぞれの都合に合わせて取り入れられた。たとえば R.W. エマーソンの「超越主義」(transcendentalism) はローイのネオ・ヴェーダントの影響を強く受けたとされ²³、またセーンの時期、エマーソンや T. パーカーの全著作が協会内で回覧されてもいた²⁴。

こうした知識人エリートの動きとは対照的に、近代的素養をまったく身に着けず、ヒンドゥー教の伝統を自ら体現したのがラーマクリシュナである。彼は偉大な聖者として、広く当時の人びとに影響を与えていた。ヒンドゥー教のカーリー女神を崇拝したが、ヒンドゥーの神々のみならず、キリスト教やイスラム教の神を見るという体験をし、すべての宗教は存在の意味をもつとし、一体であり、真であると説いた²⁵。ヴィヴェーカーナンダはベンガルの裕福な家庭で育ち、西洋的教育を受け、当時の知識人青年としてセーンのブラフマ・サマージに入会した。しかし、ラーマクリシュナに出会って深く感化を受け、葛藤の末に彼の弟子になった。そして師の死後、僧院を出てインド各地を 5 年にわたって遍歴放浪し、貧困に苦しむインドの救済を求めてアメリカに渡ったのである。

万国宗教会議は、実は「キリスト教による宗教の統一という包括主義」が内に潜んでいたが、キリスト教の絶対性を信じる者は会議自体を否定し、出席しなかったため、排他的ではなかった²⁶。議長、ヘンリー・パロウズは、プレスビテリアンであったが、ユニテリアンが会議をリードしており、また従来の宗教だけでなく、心霊現象を信じるスピリチュアリズムや、1875 年にヴラヴァツキー夫人とヘンリー・オルコットによって創設された神智学 (ヒンドゥー教や仏教の概念を中核的教義とし、1882 年からはインドに本部を置いた)、1879 年にメアリー・エディ・ベーカーが創始したクリスチャン・サイエンスなど、当時、影響力をもった新興のカルト的神秘主義的宗教の代表も含まれていた。アメリカに渡って費用が尽き、なすすべのな

かったヴィヴェーカーナンダを助け、パロウズに手紙を書いて宗教会議に参加させたのも、彼の講演に集まったのも、カルト的秘教的グループの人びとであった²⁷。つまり、ヴィヴェーカーナンダの成功は、彼のカリスマ的な力が非常に大きかったにせよ、それだけではなく、植民地インドと世紀末の欧米の、双方の宗教事情や思想傾向を反映したのもでもあった。

3 『ラージャ・ヨーガ』の人気

宗教会議のあと、ヴィヴェーカーナンダはアメリカ各地で彼の信奉者たちに講演を行い、聴衆が彼に求めているものをよく理解し、自らの教えをうまくそれに適応させていった。人間を 4 つの類型に分類し、その類型によってそれぞれふさわしい 4 つのヨーガがあるとした。それによってあらゆる宗教的ニーズに応える「普遍宗教」の典型的なかたちが提示されることになったとエリザベス・ド・ミシエリスは指摘するが、ここでヴェーダントが再解釈され、単純化され、近代化されて、ヨーガの名によって説かれたのである²⁸。

ヴィヴェーカーナンダの唱えた 4 つのヨーガを、玉木康四郎は『近代インド思想の形成』において「人間の歩むべき道」とし、それぞれに、「実践の道」(カルマ・ヨーガ)、「信愛の道」(バクティ・ヨーガ)、「心身統一の道」(ラージャ・ヨーガ)、「智慧の道」(ジュニャーナ・ヨーガ) の語を当てている。これら 4 つのうち、「カルマ・ヨーガ」は実践 (自己の本務を尽くすこと) を通じて、「バクティ・ヨーガ」は信愛 (神を信頼し、愛して、自己の一切を神に捧げること) を通じて、「ジュニャーナ・ヨーガ」は「智慧」を通して、「自己の根源に目覚め、解脱に達すること」をめざす「人間の精神」に関わる教えである。しかし、「ラージャ・ヨーガ」はこれら 3 つの道とは違って「心身統一の方法」を述べており、そこでは道徳的、肉体的、精神的な「訓練」法が説かれている。また、玉木は、「解脱という同一の目標から見れば、4 つの道は、いちおう区別されているとしても、たがいに含み合い、重なり合っている点もあろう」といいながらも、ヴィヴェーカーナンダのヨーガの最終目標は、「智慧の道」(ジュニャーナ・ヨーガ) であると述べ²⁹、ロマン・ロランも、同様の観点を示している³⁰。

しかし、アメリカで人気を博したのは、他の何よりも、プラクティカルな「ラージャ・ヨーガ」であった。ヴィヴェーカーナンダの講演は記録され、1896 年にカルマ・ヨーガについての最初の本が出たのち、同年、『ラージャ・ヨーガ』が出版された。それは、たちまち

売り切れて別版が出された。人びとは、ロマン・ロランによれば「世界征服の幼稚不健全な秘密を求めて力のヨーガ——ラージャ・ヨーガ——に飛びついた³¹⁾」のである。『ラージャ・ヨーガ』は以後、今日まで、廉価版からより高価なものまで多くのバージョンが出版され続けており、日本語版も入手できる。

『ラージャ・ヨーガ』は、彼のニューヨークでの講演の記録と「パタンジャリのヨーガ格言集」からなり、全体として主にパタンジャリの『ヨーガ・スートラ』の八部門が詳しく解説されている。しかしその解釈は、それまでの『ヨーガ・スートラ』の訳と比べて実践的で³²⁾、たとえば、プラーナ(呼吸)とプラナーヤーマ(調息)については、ハタ・ヨーガの生理学的要素が加味され、彼の読者たちを考慮して、以下のように述べられている。

すべての力はこのプラーナに帰納されており、プラーナを把握した者は心理的であれ物理的であれ、宇宙間のすべての力を把握したのです。……どのようにプラーナを制御するか、というのがプラナーヤーマです。その方法に関するすべての訓練と練習は、この唯一の目的に向けられています。……われわれ自身の心と肉体のエネルギーを代表するプラーナのこの小さな波は、無限のプラーナの大洋のすべての波の中で、われわれに最も近いものです。もしその小さな波を制御することに成功するなら、われわれはそのときにはじめて、自分がプラーナの全部を制御し得るのを期待することができるのです。これを成し得たヨーギーは完成したのです。もう彼は、どのような力の支配もうけません。彼はほとんど全能、ほとんど全知になります。われわれはどこの国にも、このプラーナの制御をこころみたグループを見ます。この国(アメリカ)にも、精神治療家、信仰治療家、降神術者、クリスチャンサイエンティスト、催眠術者などという人びとがあり、このようなさまざまな団体をしらべると、それぞれの背後に、彼らが知る知らぬにかかわらず、このプラーナの支配が見出されるでしょう。彼らの理論のすべてを煮つめると、結果はそうなるでありましょう。ただ彼らが知らないだけであって、あついているのは同一の力です。彼らはある力の発見にでくわし、無意識のうちに、その性質を知らないで使っているのですが、それはヨーギーが使っているプラーナからくるものと同じです³³⁾。

19世紀にアメリカで禁酒運動、女性解放、奴隷解

放などの社会運動が広がった背景にはメソディストやクエーカー教徒の影響が大きかったと述べながら、橋本満は「メソディストは、その宗教の名前が示すように、救済の方法(method)を教えた。この宗派から分かれたクエーカー(フレンズ)は、揺れる(quake)という方法によって、救済を得ようとした。この形、すなわち儀礼をとれば、聖職者に限られていた高みに、非聖職者(素人信者)が登れるのであった」と、アメリカで方法論が容易に魂の救済に結びつけられたことを指摘している³⁴⁾。身体を媒介に「聖職者に限られていた高みに、非聖職者(素人信者)が登れる」新たな方法論として、『ラージャ・ヨーガ』が受け入れられる土壌があったといえるだろう。さらにそこには、ヒンドゥー教の伝承から、物理学、心理学、解剖学などの西洋科学、近代哲学からブラフマ・サマージの思想、アメリカで人気のあったメスメリズム(動物磁気)、オカルティズム、代替医療等々までが流れ込んでいた。『ラージャ・ヨーガ』は、『ヨーガ・スートラ』に近代ヒンドゥー思想と19世紀西洋の諸観念とを混淆させたものであり、ヴィヴェーカーナンダの追従者たちが容易に理解し、解釈できる教えであった³⁵⁾。それは世紀末の神秘主義的傾向をもつ人びとを魅了するとともに、「方法論」として開かれた柔軟性を備えていたのである。

4 「古典」化される『ヨーガ・スートラ』

ミルチャ・エリアーデは、「インド文献において『ヨーガ』という語がもつすべての意味の中で最も顕著なものは、ヨーガ『哲学』、特にパタンジャリの『ヨーガ・スートラ』、およびその注釈書において述べられた『哲学』という意味である。……パタンジャリによって形を与えられ、彼の注釈者たちによって解釈されたこの『古典』ヨーガは、また西洋においてもいちばんよく知られている」、「パタンジャリのおかげで、それまで『神秘主義的』であったヨーガは、『哲学システム』となったのである」³⁶⁾(『ヨーガ』1954年)と述べている。『ヨーガ・スートラ』をヨガの古典とするこうした観点は、もちろんエリアーデに限らず、遑てはヴィヴェーカーナンダに見られるし、今日のヨガにおける一般的な認識でもある。先に見たように実際にはアーサナが示されていないにもかかわらず、『ヨーガ・スートラ』はいわば、今日のヨガの正当性、真正性を保証する権威の源泉となっている。

しかし、『ヨーガ・スートラ』は、果たして「古典」

なのか？マーク・シングルトンは「古典」としての『ヨーガ・スートラ』は、近代の産物であり、19 世紀から 20 世紀にかけてイギリスのオリエンタリストとインドの学識との相互作用の中で構築されたという。それを示す例として、彼は、19 世紀半ばにベナレス・サンスクリット・カレッジの学長であったジェームズ・バラントインがインドの六派哲学の新しい翻訳をベナレスの賢者たちに依頼したとき、ヨーガ学派の段になってこのプロジェクトが潰れかけた、というエピソードを挙げている。ベナレスには、英語を学ぼうとし、プロジェクトを助けようとしたたくさんの学者がいたにもかかわらず、誰ひとりヨーガの体系について教える者はいなかった。ヨーギはいたにせよ、伝統的なヨーガの実践は、このパタンジャリの体系とはつながっていなかったのである。そして『ヨーガ・スートラ』は、西洋哲学と、自覚的に伝統的な知を切り離れたネオ・ヒンドウイズムとの対話の中で翻訳され、新たな位置が与えられた。その背景には、植民地下で、インドに恥ずべきでない、価値ある知識があることを示すためには、インド自身ではなく、西洋の知的伝統によって六派哲学の有効性を確立しなければならない、という差し迫った必要があった。さらに、純粋な西洋モデルにはない、実践的で精神的な方法を示す点で、この書は西洋に対抗する自己肯定の手段ともなった³⁷。こうして形成された『ヨーガ・スートラ』は、オリエンタリズムとインドの教育システムの中で地位を高め、大学のテキストにも導入された。その教育を受けたヴィヴェーカーナンダが最初に出会ったのも、この種の哲学的翻訳であったとシングルトンは推測している³⁸。

『ヨーガ・スートラ』は、インド人の文化的ナショナリズムのサークル内で、ヨーガの無垢な「古典」となり、密教的なハタ・ヨーギの存在は古典的価値に相反するか、価値に値しないとみなされるようになった。ヴィヴェーカーナンダも『ラージャ・ヨーガ』構築のためにハタ・ヨーガを研究したのは明らかであるが、ハタ・ヨーガに触れた部分で「われわれは、ここではそれには関係しません。その実践はたいそうむずかしくて 1 日で学ぶことはできず、そして結局、霊性の成長にはあまり役にたたないのですから」と述べ、その実践を排除している³⁹。

哲学としてのクラシカル・ヨーガを称賛し、ハタ・ヨーガの実践を宗教的墮落と見る観点は、シングルトンによれば、インド知識人にも、またマックス・ミュラーや、おそらく彼を情報源の一つとしたマックス・

ウェーバーにも見られるという。純粋であった宗教が墮落し、やがてかつての栄光を取り戻す、という物語である。こうして西洋の知識人によって是認され強化された「古典」という観念は、インドのアイデンティティと威厳を確立しようとしていたナショナリストに、文化的根拠を与えることになった⁴⁰。ヴィヴェーカーナンダの『ラージャ・ヨーガ』は、いわば『ヨーガ・スートラ』のこのような古典化のプロセスを完成したものであった。

しかしこの時期にはまだ、アーサナ中心の今日のモダン・ヨガは誕生していない。ヴィヴェーカーナンダの『ラージャ・ヨーガ』が書かれた年に、アテネでは近代オリンピックが開催された。オリンピックに代表される、19 世紀末から 20 世紀にかけて西洋で盛り上がった身体文化の運動と、ハタ・ヨーガは結びつき、そしてグローバル化する。その経緯とともに、日本での受容の諸相について考察することが、次の課題である。

注

¹ Yoga を、日本では「ヨガ」あるいは「ヨーガ」と呼んできた。山下博司は語源であるサンスクリット語は「ヨーガ」と発音すべきであるが、日本人の耳には「ヨーガ」というより「ヨガ」と聞こえなくもないともいう。また、日本で「ヨガ」というカタカナ表記が一般的であることについて、サンスクリット語から借入した yoga という英語をそのまま日本語のローマ字読みにしたのかもしれない、と推測している（山下博『ヨーガの思想』講談社選書メチエ、2009 年、20-21 頁）。本稿では、文献に多く「ヨーガ」が用いられていることから便宜上、「ヨーガ」とし、今日の社会現象に限る場合にのみ「ヨガ」を用いる。

² YJ editor, "New Study Finds More Than 20 Million Yogis in U.S." *Yoga Journal*, Dec 5, 2012, [Yoga Journal](http://www.yogajournal.com/uncategorized/) <http://www.yogajournal.com/uncategorized/>

³ 河原和枝「フィットネスの文化」『日常からの文化社会学』世界思想社、2005 年、59-84 頁。

⁴ NHK テレビテキスト『きょうの健康』2014 年 5 月号、54 頁。

⁵ 佐保田は 62 歳でインド人について初めてヨガのてほどきを受け、以後、ヨガを実践するとともに多くのヨーガ経典を翻訳した。

⁶ 佐保田鶴治『解説ヨーガ・スートラ』平河出版社、1980 年、12-13 頁。

⁷ ヨーガの分類法は一樣ではなく、たとえばアメリカの著名なヨーガ研究者、ゲオルグ・フォイアーシュタインはヨーガの主流派として「ジュナーナ・ヨガ＝知の道」「カルマ・ヨガ＝無私の行動の道」「バクティ・ヨガ＝愛と献身の道」「聖音の道＝マントラ・ヨガ」「内的パワーの道＝ハタ・ヨガ」そして「ラージャ・ヨガの王の

- 道（パタンジャリの『ヨガ・スートラ』の古典ヨガ）」を挙げ（『考えるヨガ』スタジオ・ヨギー監訳、2005年、ロハスインターナショナル）、ミシェリスは、「カルマ・ヨガ＝行為のヨガ」「ジュナーナ・ヨガ＝知識のヨガ」「バクティ・ヨガ＝献身のヨガ」と「タントラ・ヨガ」の4つに分類している（Elizabeth De Michelis, 2008, “Modern Yoga : History and Forms,” Mark Singleton and Jean Byrne ed., *Yoga in the Modern World : Contemporary Perspectives*, Routledge Hindu Studies Series.）
- ⁸ 佐保田、前掲書、14 頁。
- ⁹ 山下、前掲書、58 頁。
- ¹⁰ 佐保田、前掲書、30-31 頁。
- ¹¹ 同書、40、41 頁。
- ¹² 『ヨガ・スートラ』などの古典ヨガは精神と物質を区別する二元論を信奉するが、その後のヨガは古代からインドにおいて主流だった不二一元論（アドヴァイタ）に立つ。
- ¹³ しかしこの座法（パドマーサナ（蓮華座）やシッダーサナ（達人座）といった脚をクロスして座るヨガのポーズ）は、今日のヨガにおいてもヨガの象徴的役割を果たしている。
- ¹⁴ 佐保田鶴治『ヨーガ根本経典』新装版、平河出版社、1982年、38 頁。
- ¹⁵ 山下、前掲書、136-160 頁。
- ¹⁶ Kenneth Liberman, 2008, “The Reflexivity of the Authenticity of Hatha Yoga,” M.Singleton and J. Byrne ed., *op.cit.*
- ¹⁷ 沖正弘『秘境インド探検記 ヨガの楽園』光文社、1962年、28-56 頁。
- ¹⁸ Mark Singleton, 2010, *Yoga Body*, pp.39-40.（喜多千草訳『ヨガ・ボディーポーズ練習の起源』大隅書店）、2014年、50-52 頁）
- ¹⁹ 森孝一「シカゴ万国宗教会議」『同志社アメリカ研究 26』同志社大学、1990年、1-3 頁。
- ²⁰ 世界でもっとも古い僧団とは、ヴェーダのサンニャーシンの団体を、もろもろの宗教の母とはヒンドゥー教をさす。
- ²¹ スワミ・ヴィヴェーカーナンダ『シカゴ講演集』日本ヴェーダ学会、1995年、7、8 頁。スワミ・テジャサーナンダ『調和の預言者 スワミ・ヴィヴェーカーナンダの生涯と教え』日本ヴェーダ学会、2013年、67-70 頁。Elizabeth De Michelis, *A History of Modern Yoga*, 2004, Continuum, pp.112, pp.149.
- ²² ロマン・ロラン『ロマン・ロラン全集 15 伝記Ⅱ ラーマクリシュナの生涯・ヴィヴェーカーナンダの生涯と普遍的福音』宮本正清訳、みすず書房、1980年、204 頁。
- ²³ ウパニシャッドに憧れて森の生活を体験したソローも、トランセンデンタリズム運動の推進者であった。ソローは、初めてヨガを実践した西洋人であった。また、ウィリアム・ジェイムズは、当時流行したアメリカの精神療法（Mind-Cure）について「その要素として見られるのは、四福音書、パークレーとエマーソンの理想主義、交霊説と、相つぐ多くの生を通じて魂が漸次進化するという法則、楽天的、通俗の進化論、インドの諸宗教である」と述べた（ロラン、前掲書、272 頁）。
- ²⁴ 前田専学「英領インドにおける思想運動」早島鏡生・高橋直道・前田専学『インド思想史』東大出版会、1982年、220-222 頁。Michelis, *op.cit.*, pp.52-90.
- ²⁵ 前田、同書、223-224 頁。
- ²⁶ 森、前掲書、13 頁。
- ²⁷ Michelis, *op.cit.*, p.113.
- ²⁸ *Ibid.*, pp.123-124.
- ²⁹ 玉木康四郎『近代インド思想の形成』東京大学出版会、1965年、216-222 頁、268-269 頁。
- ³⁰ ロラン、前掲書、298 頁。
- ³¹ ロラン、同書、298 頁。
- ³² 『ヨーガ・スートラ』の訳は、4章で述べる事情で、当初、純粹理論の要素が強調されていた。実践的要素が強くなったのは、1890年の神智学協会の援助によるドゥヴィヴェーディの訳からであり、シングルトンは、ヴィヴェーカーナンダがアメリカで『ラージャ・ヨーガ』を構築した際は、当時、広く普及していた、神智学者ウィリアム・Q・ジャッジの大衆向けの『ヨーガ・スートラ』の訳を用いたであろうと述べている。M. Singleton, 2008, “The Classical Reveries of Modern Yoga : Patañjali and Constructive Orientalism,” M. Singleton and J. Byrne ed., *op.cit.*, p.85.
- ³³ スワミ・ヴィヴェーカーナンダ『ラージャ・ヨーガ』日本ヴェーダ学会、1997年、48-49 頁。
- ³⁴ 橋本満「近代日本における『宗教』の発見、あるいは宗教社会学の起点」『甲南女子大学紀要』第49号、2013年、138-139 頁。
- ³⁵ Michelis, *op.cit.*, pp.150-151
- ³⁶ エリアーデ著作集9『ヨーガ①』立川武蔵訳、堀一郎監修、せりか書房、1975年、28、30 頁。
- ³⁷ Singleton, 2008, *op.cit.*, pp.80-82, 85.
- なお、シングルトンは、バランタインの30年ほど後のミトラ版の訳でも同様に、ヨガの実践者に協力者が見つけられなかったこと、序文でパタンジャリを西洋の哲学者たちと並べようと努めていることを指摘している（*Ibid.*, p.81.）
- ³⁸ Singleton, *ibid.* p.84
- ³⁹ ヴィヴェーカーナンダ、前掲書、32 頁。ヴィヴェーカーナンダは、師、ラーマクリシュナの死後、ハタ・ヨーガで体を鍛えようと当時有名なヨーギについて学ぼうとしたが、くり返し、師のヴィジョンを見て断念したという（Singleton, 2010, *op.cit.*, pp.72-73. 訳書、92-93 頁）。
- ⁴⁰ Singleton, 2008, *op.cit.*, p.87.